

長男、手震え・自殺未遂・市販薬盗み

県内初の裁判員裁判は、ロシア人の被告が覚せい剤を密輸したとされる事件。被告は持ち込んだものが覚せい剤だったことは認めており、検察側は覚せい剤の「害悪性」を訴える。覚せい剤中毒になった息子を持つ県内の男性も、覚せい剤の実情への理解が世の中に広まって欲しいと願い、裁判に注目している。

(大内奏)

川口の小西さん、裁判に注目

17日の証拠調べで、検察官は「覚せい剤を使い続けると、精神依存、中毒のほか、脳の働きが低下することも明らか」と主張。他県で覚せい剤使用者が起こした殺人未遂・放火事件の実例も挙げた。

覚せい剤に手を染めた長男(32)を持つ、川口町の小西憲さん(62)も、覚せい剤の害悪性に悩まされた一人だ。1997年。当時19歳の長男は、東京の専門学校生だった。ある日、小西さんの元に長男の



覚せい剤の害悪 「知ってほしい」

裁判員 法廷

@新潟

暮らすアパートの家賃や光熱費の請求書が届いた。長男は「お金がなくなった」「うつになった」と説明した。

患者の薬も盗んだ。薬物依存症者の社会復帰を目指す民間施設「ダルク」に駆け込むと、「薬物依存症は一生治らない」と言われた。

長男はその後、全国の五つのダルクを転々とし、覚せい剤を断つ生活を続けてきた。昨年1月から東京で一人暮らしをするまでに回復したが、定職は持たず、障害者年金と生活保護で暮らしている。

小西さんは長男を自宅に連れ帰り、病院に通わせた。ただ、治療は効果をあげず、長男は病院から脱走した。手が震え、家では昼夜逆転の生活。自殺未遂も繰り返した。

小西さんは「県薬物依存症者を抱える家族の会」を02年に立ち上げた。「世間体を気にして治療の機会を逃す家族も多い。(裁判員制度を通じて)理解が進み、少しでも早く治療の場を提供できる社会になって欲しい」と話す。

00年に別の病院で「覚せい剤による薬物依存症」と診断され、覚せい剤の使用がわかった。実は長男は、専門学校時代に、新宿で水商売のアルバイトをしていた。その時に、覚せい剤をおぼえたのだった。

長男は処方された抗うつ剤のため、一度に大量に飲んでしまった。覚せい剤と同じ感覚が得られたからだ。市販薬や別の

内閣府によると、一昨年に覚せい剤の使用や密輸で検挙されたのは約1万1千人で、押収量は約400kg。今回密輸されたのは約4.7kg。これだけでも約23万7千回の使用量に相当する。実際の使用者数や流通量は政府も把握しきれていない状況だ。



新潟総局
〒951-8133
新潟市中央区川岸町1-47-2
☎ 025-266-2151
fax 025-266-2155
mail nigata@asahi.com

長岡支局
〒940-0061
長岡市城内町3-3-1
☎ 0258-35-1234

上越支局
〒943-0805
上越市木田2-1-1
山和ビル5階
☎ 025-526-6333

佐渡 ☎ 0259-27-3516
柏崎 ☎ 0257-22-2865
新発田 ☎ 0254-22-2080
六日町 ☎ 025-772-2620

きょうの天気

6-12時 降水確率 12-18時

30	新潟	40	高田
60	村上	70	相川
30	長岡	40	高田
30	高田	30	相川
20	相川	40	高田
新潟	西南西	高田	西北西
村上	西	高田	西北西
長岡	南	高田	北
新潟	南	高田	北

湿度 70%
波 5.0m
最高度 8度
最低度 3度
最高度 6度
最低度 2度
最高度 7度
最低度 2度
最高度 8度
最低度 3度